

百瀬恒彦個展 「tatouage」

会期:2023年6月8日(木)-7月2日(日)

開館時間:木金土日(月火水祝休) 13:00-18:00

(上記以外の時間でビューイングをご希望の方はご予約にて承ります。)



和紙にプリントしたモノクロ写真に顔料で着色し、「写画」と名付けた作品を制作する百瀬恒彦。弊ギャラリーで初の展示となる本展では、入れ墨を施した身体をテーマとしたシリーズ「tatouage」をご紹介します。

日本各地で出土する土偶や埴輪にもその痕跡が見られると言われるほど長い歴史を持つ入れ墨文化は、江戸時代には絵師や彫り師のもと、高い芸術性を持った身体表現のひとつでした。一方で、近代以降の我々の社会は入れ墨を忌み嫌い、ネガティブな意味合いを持たせてきました。マザーテレサのポートレートで知られる百瀬は、それまでの作品とは対照的に、「陰」のイメージを持ちながらも高い芸術性を維持してきた和彫り文化に強く惹かれ、入れ墨を施した身体と人々をテーマに、十分な時間をかけ今回のシリーズを制作しました。越前和紙に現像したモノクロ画像に顔料で色付けを行う制作方法で生み出された一点ものの作品を中心に、写真作品も数点展示予定です。この機会に是非ご高覧ください。

以下は、本シリーズに向けて寄せられた詩人の谷川俊太郎氏による文章です。

紙は剥がされた皮膚、
幻のように浮かび上がる入れ墨の思い出、
歯を食いしばった痛みはもう忘れられ、滲んだ血はもう褪せている。
だがこの華やかな傷痕、心は体に何を求めたのか？

死ぬまで裏切れぬ誓い、
永遠に脱ぐことの出来ぬ悔い、
眼差しよりも表情よりも雄弁な決意、
死すべきからだを画布としてどこまでも隠す裸身。

入れ墨する人々、
その目に見えぬ連帯のうちにひそむ
なにものかへの恐れ……

— 谷川俊太郎

百瀬恒彦 | Tsunehiko Momose

1947年9月、長野県生まれ。武蔵野美術大学商業デザイン科卒。在学中から、数年間にわたってヨーロッパや中近東、アメリカ大陸を旅行、卒業後、フリーランスの写真家として、女性雑誌などで、主にポートレートのグラビア・ページを手がける。仕事、あるいは個人で世界各地を旅行、風景よりは人間、生活に重きを置いた写真を撮り続ける。

共著書に谷川俊太郎氏の詩と写真集『子どもの肖像』（紀伊國屋書店）、村松友視氏の文と写真集『そして海老蔵』（世界文化社）などがある。

Website : <https://www.momosetsunehiko.com>

本展に関するお問い合わせ先：
エステルオカダアートギャラリー
東京都渋谷区代々木 5-24-10
www.zulaarts.com
EMAIL: esther@zulaarts.com
TEL: 03-4500-7231